

法華章疏における五分釈の展開

金 炳 坤

一 序言

一般に、中国仏教史上における『法華経』注釈の四大家⁽¹⁾とは、光宅寺法雲(四六七―五二九)・天台大師智顛(五三八―五九七)・嘉祥大師吉藏(五四九―六二二)・慈恩大師基(六三二―六八二)を指す。それは、彼らの著疏が変貌する時代に栄枯盛衰を繰り返しながらも、散逸することなく、現代まで受け継がれてきた点に大きく依存しているからであろう。

しかしながら、このような近現代の理解とは別に、中国本土での実際、なかでも九世紀当時の『法華経』講讚の実情を伝える資料によれば、その様相は少しく異なる。

すなわち、鏡水寺栖復が彼の著(八七九)において、然るに疏を造るは、前後に十九余家あり。盛んに世に伝わるは、即ち、天台・紀国・嘉祥・慈恩なり。天台疏を『文句』と名け、紀国を『讚述』と名け、嘉祥疏を『義記』と名け、慈恩疏を『玄贊』と名く。(『法華経玄贊要集』新統蔵三四・一七一中)

と証言しているように、当時は、すでに検証済みの古き理解と評されたためであろうか、南北朝を代表する光宅にかわって、紀国を加えた四大家が挙げられる。

一方、この時代に対する日本仏教界での理解を、九世紀の初頭に入唐(八〇四)した空海(七七四―八三五)の記述(八二九)によってみれば、

漢家の釈に、且く三宗あり。慈恩・嘉祥・台山なり。…自外に、光宅の雲法師・紀国の慧浄・新羅の元暁・日本の聖徳あり。…(慧)沼師の『義決』、(智)周公の『撰釈』、(崇)俊の『決撰(記)』、(清)素の『纂要』、(湛)然の『(釈)籤・(文句)記』あり。(『法華経開題』大正蔵五六・一八〇上)

と東アジアの三国を包括した三宗十二家が列記される。

上掲の両記述中に見られる紀国寺慧浄(五七八―六四五?)は、法華弘通史の中核を担う大成者の一人として位置づけられている。

二 『妙法蓮華經續述』の発見

彼の長らく逸書であるとされていた『妙法蓮華經續述』（以下『續述』）十卷は、筆者の調査によつて、このたび韓国にその一部が刊本（①「宝物第二〇六号」巻一—二・序品、②「宝物第一四六八号」巻五・譬喻品、巻六・信解品—授記品）として現存していること、さらに、敦煌文書のなかには『續述』を適宜に抄出し、しかも現存刊本の欠損部分（巻三—四・方便品）を含んでいる写本（スタイン本「S六四九四」、以下『論義』）の存在が明らかとなった。⁽³⁾したがつて、『續述』全体を通しての考察までには至らないが、少なくとも、十巻のうち、六巻（序品—授記品）については、その教理の体系および後代への影響が論じられうるのである。

『續述』の撰述年代は明確ではないが、序品の釈文に、自らが筆受にあつた『大乘莊嚴經論』からの引証が見られることから、本論の訳了（六三三）を上限とし、また、慧浄伝に基づけば、貞観十三年（六三九）の事柄として、『法華經』の「序品第一」の解釈をめぐつて道士蔡晃と抗論する際に慧浄が述べたとする説が、『續述』にそのまま見出される（『続高僧伝』大正蔵五十四四四上、『續述』巻一・一裏）ことからこれを下限と推定しうるのみである。或いは道宣（五九六—六六七）が『續述』を知つて後からこれを補つたとしても、

『續述』には玄奘（六二四—六六四）訳の影響が見られないから、彼の帰還（六四五）以前であることは確実である。

以下、本稿では、新発見の史料をもとに、『續述』がその後の法華章疏に及ぼした影響をとくに方便品に見られる五分釈に焦点を絞つて検討を加えたい。

三 五分釈の展開

『法華經』の方便品を(1)歎法勝妙分、(2)歎法師功德分、(3)定疑分、(4)定記分、(5)断疑分と五つの段落に分科して解釈するいわゆる五分釈とは、『妙法蓮華經憂波提舍』（以下『論』）の五分示現（大正蔵二六・十中）、すなわち、(1)妙法功德具足、(2)如来法師功德成就、(3)示現三種義、(4)示現四種事、(5)断四種疑心（同・五中—七下）の影響を受けたものであるが、最澄（七六七—八二二）が徳一（—七六〇—八三五）を論駁するにあつて『守護国界章』において指摘（大正蔵七四・二〇二上—下）しているように、五分釈の名目そのものは『論』の本文には見当たらず、また、『論』の末疏中最古とされる吉蔵の『法華論疏』（吉蔵は五分示現を五段と称する。大正蔵四十・七九九下）にも見当たらない。

既知の法華章疏からすると、五分釈は、基の『妙法蓮華經玄贊』（大正蔵三四・六九六上—下、以下『玄贊』）に端を発するといえようが、西域出土の法華章疏を含めて総合的に考察し

検討することによって、五分釈に四つのタイプ（*名目の相違による）があり、地域（敦煌、朝鮮半島、中国、日本）・宗派（法相宗、中国天台宗、日本天台宗）ごとに分立して展開していくことが確認できた。これまでの調査によって明らかとなった五分釈の四つタイプをまとめてみると以下のようになる。

- 【一】敦煌・朝鮮半島 * (1) 歎妙法功德分、(2) 歎法師功德分、(3) 疑請分、(4) 授記分、(5) 断疑分 ▼ ① スタイン本「S六四九四・『妙法蓮華経論義』」名目・略解・段落始の经文・詳解（S六四九四・三八―二四三行） ② スタイン本「S二六六二・『法華問答』」名目・略解（大正蔵八五・一九九中） ③ 義寂（一七〇二）撰『法華経論述記』名目・略解（新統蔵四六・七九三下）
- ④ 石鼓寺智雲（一七六六―七七九）撰『妙経文句私志記』名目（新統蔵二九・一六〇中）
- 【二】法相宗 * (1) 歎法勝妙分、(2) 歎法師功德分、(3) 大衆定疑分、(4) 定記分、(5) 断疑分 ▼ ① 基撰『妙法蓮華経玄贊』名目・段落始の经文・略解・詳解（大正蔵三四・六九六上―七二〇中） ② 栖復集『法華経玄贊要集』名目・段落始の经文・略解（新統蔵三四・五二九下―五三〇中・六〇六上・六二七下） ③ 徳一語「最澄撰『守護国界章』」所収『中辺義鏡』名目・段落始の经文・略解（大正蔵七四・二〇二上―下）
- 【三】中国天台宗 * (1) 歎法勝妙分、(2) 歎法師功德分、(3) 智衆定疑分、(4) 定記分、(5) 断疑分 ▼ ① 湛然（七一―七八二）述『法華文句記』名目・段落始の经文（大正蔵三四・一五三中、以下『文句記』） ② 永定寺道暹（一八一―八一）述『法華天台文句輔正記』

法華章疏における五分釈の展開（金）

- 名目・略解（新統蔵二八・六三七上―中） ③ 源信（九四二―一〇一七）撰『天台円宗三大部鈎名目』名目（『恵心僧都全集』二・三二〇上） ④ 従義（一〇四二―一〇九一）撰『天台三大部補注』名目の一部（新統蔵二八・一九一上）
- 【四】日本天台宗 * (1) 歎妙法功德具足分、(2) 歎法師功德成就分、(3) 大衆定疑分、(4) 定記分、(5) 断疑分 ▼ ① 最澄鈔『法華論科文』名目・段落始の经文（『伝教大師全集』三・七四一・七五一、以下『論科文』） ② 円珍（八一四―八九一）述『法華論記』名目・詳解（『智証大師全集』一・一二二下・一三〇上・一四八下・一五二上・一八〇下、以下『論記』）

すでに述べたように、タイプ【一】に属している①『論義』は『續述』の抄出であり、そこには余計な補足がほとんど見られない。そして『續述』は、タイプ【二】に属している①『玄贊』より先行する文献である。したがって、五分釈の起源は、慧浄の『續述』に認められ、タイプ【一】は、その原形とみることができるといえる。ゆえに、五分釈の内容に関しても、原初形態を保っているタイプ【二】に、なかでも略解（要点のみの解釈）・詳解（詳しい解釈）を具備している①『論義』に求めるべきであるが、①『論義』はあくまでも『續述』の抄出であるため、慧浄の五分釈を正確に理解するためには、最も詳細な解釈内容を有するタイプ【二】の①『玄贊』と照合しつつ考察せねばならない。

とくに、タイプ【一】に属し一群を成している智雲は、円

珍の伝承（『授決集』大正蔵七四・二九八中）によれば、湛然の門弟であったことが知られており、この点からすれば、タイプ【一】に分類されるのは些か異例ともいえようが、彼は追うべきところのタイプ【三】の①『文句記』に対しても批判を加えたほどであるから、五分釈については慧浄の説を採用したと考えられる。タイプ【三】では、五分釈はそれほど重要視されず、わずかに名目を挙げる程度に止まっている。また、例外として日本天台宗の③源信が、タイプ【四】ではなく、タイプ【三】に分類されるのは、彼が『妙法蓮華經文句』における名目を約するにあたって、その素材として①『文句記』を用いたことによる。タイプ【四】に分類される①最澄の『論科文』は、対立関係にあったタイプ【二】の③徳一との差別をはかろうとした試行錯誤の末であろうか、(1)・(2)の名目を『論』に求めたところにその特質がみえる。しかし、(3)の名目は、タイプ【三】の中国天台宗の伝統から離れ、タイプ【二】の法相宗に一致している。この点はいくらか徳一の影響によるものと言わざるを得ない。以降、タイプ【四】は、日本天台宗の特色として、②円珍の『論記』において継承される。

四 結語

以上、慧浄の『續述』において考案せられ、その後の法華

章疏に影響を及ぼし展開していく五分釈のタイプ別の特徴および相互間の関連性の若干を述べるとともに、『論』の訳出以降、もっぱらその影響下におかれることとなる法華章疏がこの五分釈を採用している点に着目して、おおよそ七世紀以降に撰述された作者未詳・不知題の法華章疏の系統を分類するためのモデルケースとしての五分釈という基本フォームを提示し、それらの思想・歴史上における位置づけおよびその分類手法の確立を試みた。

1 管見によると、四大家に言及した早期の論考に、脇谷搗謙「法華經注釈の四大家——譬喩品三車四車の解釈に就て」（『六條学報』六八号、一九〇七年）がある。

2 定かでないが、『東域伝灯目録』の法華部に「同経讚三卷（清素法師述出空海僧都伝法録）：同経玄贊記四卷（清素撰）」（大正蔵五五・一一四九下）とあり、両者のいづれかと思われる。

3 詳しくは、拙稿「紀国寺慧浄の『法華經續述』考(1)——新発見の史料をもとに」（『身延論叢』十五号、二〇一〇年）参照。

〈キーワード〉 慧浄、『妙法蓮華經續述』、『法華論』、五分示現
（立正大学大学院）